那覇市立若狭小学校　　特別支援教育通信（教職員用）

特別支援だより　No. 4

令和２年４月26日（月）　　特別支援教育コーディネーター　松田敦子

特別支援教育はチーム支援です

「いくら学習しても積み上がらない・・・」「何度も同じことを言っても同じあやまちをを繰り返す・・・」など，一見問題と思われる行動も、発達障がいの視点からみると，それなりの要因があることがわかります。「なぜだろう」と考えていくと，子ども達の困り感が見えてきます。指導に困った時は，学校と保護者，校外の協力者とともに，より効果的な指導方法を探していく，という発想が大事です。チーム支援力（多くの人が力を合わせる支援）は指導のきめ細かさを生みます。

「気になる」が出発点

つまずきに気づいたところから支援が始まります。もし，気になることがありましたら，特別支援教育コーディネーターに声をかけて下さい。

気になる点があれば下の項目にチェックしてみて下さい。

【例えば】

	友だちづきあいが苦手
	切り替えが難しい
	会話が一方的でかみ合わない
	がまんや待つことが苦手
	忘れ物やなくしものが多い
	授業中によく立ち歩く
	図形を書くことが苦手
	計算ミスが多い
	はさみ・のりづけの失敗が多い
	文字をよく書き間違える
	漢字がなかなか覚えられない
	聞き違い・聞きもらしが多い

つまずきに気づいたところから支援が始まります。
子どもの行動に戸惑い，悩んでいる方は，相談をして下さい。

たんぽぽのタネ

「困った行動」環境が鍵

當眞正太

学校や家庭の中で「困った子」とされる子どもたちがいる。例えば人をたたく、泣きわめく、やる気がないなどである。

しかし、それは本人だけの責任なのだろうか？　本人の努力ややる気の問題なのだろうか？　そう考えた時、本人を取り巻く周囲の環境という視点に目を向けていく必要がある。

例えば、教室から飛び出してしまう子どもがいたとする。行動だけを見るなら「困った子」である。その要因として衝動性が高い、読み書きが難しいといった本人の特性はあるかもしれない。一方で、環境にも要因がある可能性がある。

例えばたくさんの刺激のある教室、本人の認知特性に合わない教え方、周囲からのネガティブな関わり、ノートや教科書、鉛筆で書くのが前提の授業などが考えられる。その結果、授業中に教室を出て行くという「困った」行動をしてしまうのである。

環境との相互作用という視点で見ていくと、その子は「困った子」ではなく、むしろ適切な環境が与えられず「困っている子」ではないだろうか。

本人が周囲の刺激に困っているのなら、席を廊下側や運動場側にしない配慮が考えられる。周囲からのネガティブな関わりで困っているなら、学級の子どもたちの相互理解の工夫が必要だろう。紙と鉛筆での学習スタイルでは学べず困っているなら、電子黒板などによる写真や映像を活用した授業や、タブレット端末で文字入力をする方法、板書の撮影を許可することなどが考えられる。

環境を工夫することで本人の困り感を減少させることができる。「困っている子」を、環境との相互作用という視点で支援してみてはどうだろうか。

（特別支援学校教諭）